

2. 南アルプス南部縦走

1) 日 程

1984年07月29日～08月03日（前夜発5泊6日天幕）

2) コース

- 第1日 伊那大島—塩川—三伏峠
- 第2日 三伏峠—烏帽子岳—小河内岳—高山裏露营地—荒川前岳—荒川小屋
- 第3日 荒川小屋—大聖寺平—小赤石岳—赤石岳—百間平—百間洞露营地
- 第4日 百間洞露营地—大沢岳—中盛丸山—小兎岳—兎岳—聖岳—聖平露营地
- 第5日 聖平露营地—上河内岳—茶臼岳—横窪沢小屋
- 第6日 横窪沢小屋—ヤレヤレ峠—畑薙大吊橋—畑薙第一ダム

3) 記 録

07月29日 新宿発00:10の臨時列車にて出発。大変すいていてボックスを一人で占領してゆっくり眠る。辰野で飯田線に乗り換える。列車の中は、すべて登山客となる。伊那大島からマイクロバスで塩川へ。このバスもすいていて、走り出してまもなくぐっすり寝入ってしまった。「着いた。」という誰かの声で目を覚ます。去年三伏峠から下山してきた時とまったく様子が変わっていたのに加え、頭がまだ起きていず、どこに着いたのかしばらく理解できなかった。

塩川で朝食のパンを食べ、水を補給し、身支度を整えて出発する。河原の道は、歩き出すとすぐ見覚えがあるような気がしてくる。途中 何組か下山してくるパーティーとすれ違う。一時間くらい歩いて、道を間違えたような気がする。たしか左岸の林の中に行くはずだったと思い、林の中を見てもどうも見つからない。このまま河原を行ってもいける気がしたが、初日でもあり引き返すことにする。やはり右の林に入るハシゴを見落としていた。そこから5～6分で尾根取付点の河原に出る。

しばし休んだ後、気を引き締めて登りにかかる。1時間歩いて10分休むペースで登る。樹林の中の単調な登りが続く。五合目を過ぎて2ピッチ行ったところあたりから、お腹がすいて少し疲れ始めたので、30分ペースにする。しかしリンゴを食べて少し元気がでたので、このまま三伏峠まで行こうかと思ったが、休みついでにしっかり昼食をとる。十分元気を回復して、約30分で峠に着く。峠のテント場派狭く、あまりよい場所もなかったが、仕方なくテントを張る。三伏沢の源頭まで水を汲みに行く。今年もお花畑では、高山植物が咲き競っている。このお花畑から見る塩見岳は、いつも優しく美しい。カメラをテントに置いてきたことを悔やむ。

夕食を早めにとり、明日のことを考えて少し早いとは思いつつ18:00に寝ることにする。明日下山するパーティーなどの にぎやかな談笑を聞きながらいつしか眠りに落ちていった。

07月30日 02:50起床。外を見ると満天の星空だ。今日は荒川岳を越える。今回の山行でもメインの日といっても過言ではない。少し興奮気味で、あまり食欲もないが、今日の長丁場を重い無理して腹に詰め込む。

04:40小屋の横の国立公園のデカイ看板の裏から、お花畑を通り崩壊のふち沿いに烏帽子岳の登りにかかる。心ははやるが ゆっくりゆっくりと言い聞かせながら登る。額にうっすらと汗がにじむころ山頂に着く。塩見岳はまだ黒いシルエットだ。

今日越えるはずの荒川岳が遥か遠くに小さい。本当に行き着けるのか心配になる。前小河内岳～小河内岳への稜線がなだらかに続いている。天気がよいので、道がずうっと見渡せる。小河内岳の避難小屋の屋根が、朝日を浴びて光っている。



前小河内岳の山頂は、写真を数枚撮っただけで先を急ぐ。どうもゆっくりレストをとる気分的余裕がない。小河内岳へは一度下って登り返す。烏帽子岳方面から見ていたときより 実際はもっと回り込むようにしてしばし下る。山頂近くで避難小屋への道を左に分け、山頂へはそのまま真直ぐ登る。登りついた山頂から見た荒川岳は一向に近くなったようには見えない。ただここから荒川岳へは今までと違い、樹林に覆われた尾根道になるようだ。縦走路から外れた避難小屋にはよらずに山頂を辞す。道は疎林の尾根道となり小さな上り下りを繰り返していたが、いつしか山腹の樹林帯の中を小さな上下を繰り返しながら巻くように続く道となる。ちょうど一時間ほどで鞍部の小さな草原に出て、レストにする。ここまで来て疲れ始めたようだ。行動食をとり、気を取り直して出発。道は相変わらず樹林の中を上下していく。樹間に見え始めた荒川岳が、今朝とはうって変わってやたら大きい。今度はその大きさに気おされる。

突然樹林が切れて明るくなり、斜面一帯のお花畑の中に小さな小屋が現れた。高山裏露营地だった。まだかまだかと思いながら歩いていたが、突然着いてしまい少し気が抜けた。今日は出発が早かったので、まだ9時を回ったばかりだ。ゆっくりと昼食をとる。小屋は雨露こそしのげそうだが、内部はひどく荒れていて床板がほとんどない。燃料にされてしまったのだろう。

腹を満たしゆっくり休んで、これからだと気を引き締めて出発。鞍部まで下りきったところから、しばし登って平坦な巻き道となる。小屋の付近の明るい草原では思わ

なかったが、この辺の昼なのに薄暗いほどの深い樹林帯の中の道を歩くと、高山裏とはよく言ったものだと思う。そんな道も山腹を回りこむにつれだんだん明るくなり、沢部に入って巻き道も終わり登りになる。レストをとり 心を決めて登り始める。今まで樹林の中を歩いていたので気づかなかったが、陽射しが強く木々が少なくなるにつれ暑くなってくる。雨傘を日傘代わりにして登る。時々吹いてくる心地よい風だけが救いだ。森林限界でレストにする。ガレ場の上に稜線も見えてくるが、ここに着て暑さも加わり一気にバテがでる。真夏の陽射しが照りつけるガレ場のジグザグをあえぎながら登る。立ち止まっている時間のほうが長いくらいだったが、何とか稜線にたどり着く。目の前に荒川岳の山頂が見えているのにいく気がせずその場で座り込む。いつまでもそこにいるわけにもいかず 山頂へ。山頂ではブラブラ歩き回って写真を撮る。

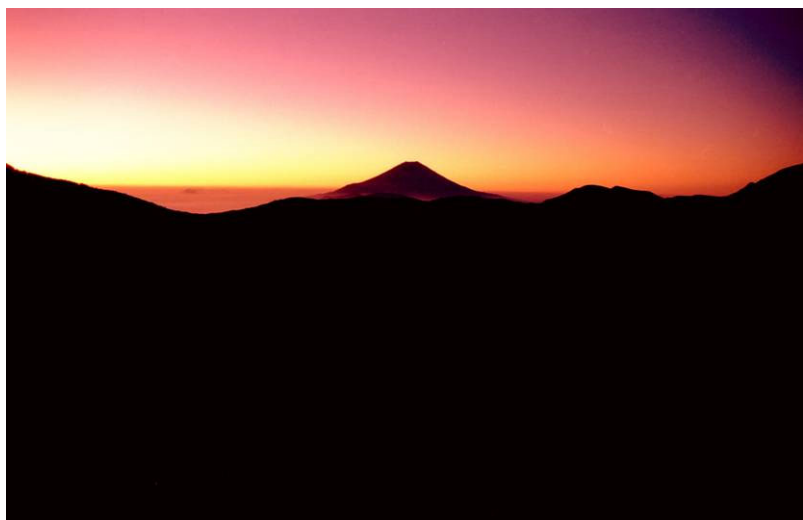
やっと歩く気になって荒川小屋へ下る。足元の黄色の花に気づき振り返ると、一面黄色く染まった斜面が、真っ青な空を三角形に切り取っていた。再び下る。途中の水場で眼下の荒川小屋付近で動き回る人々を見下



ろしながら、水を飲む。冷たい水に励まされてまた下る。

歩き始めてから10時間35分の悪戦苦闘の末 今日最終目的地荒川小屋に着く。今日一日の疲れのため、設営するのも緩慢な動作だったが、なぜか気分はさわやかだった。

07月31日 03:40起床。昨日の疲れと、今日の行程が短いこともあり ゆっくり寝た。テントの中から、日の出とともに刻々と色を変えてゆく空に黒く浮かぶ富士山のシルエットを見ながら朝



食をとる。テントを撤収して出発したのはテント場でラストだった。大聖寺平への平坦な道を涼しい風に吹かれ柔らかな朝日を浴びのんびり歩いていく。鞍部から一段登った大聖寺平で、ザックをおろし振り返る。荒



川三山が青空をバックに伸びやかに連なっている。前回来たときとまったく変わらぬ山々の姿がうれしい。景色を十分に楽しんだ後 登りにかかる。山腹をジグザグに縫う道を 時々下を見て高度を確かめながらゆっくり登っていく。登りついたピークで白旗氏一行に会う。15年前 氏の写真集「南アルプス」やガイドブックを見て南アルプスに憧れ、それ以来しばしば南アルプスに登ってきたのだが、何故か大勢のお供を引き連れた氏には挨拶する気にもなれず、付近の写真を数枚撮っただけで小赤石岳へ。3,000mの稜線の景色を楽しみながらのんびりと歩く。一旦鞍部に下り赤石小屋への道を分けた後、登り返して赤石岳へ。前回その前で記念写真を撮った 山頂を記した丸太の柱は朽ちて倒れていた。山頂には人が多く、しばらく待ったが減るところか次々に登ってくる。どうも聖岳方面から縦走してくるパーティーが多いようだ。声高に山の話をする人々を後に百間平へと出発。

小さな雪溪の残るくぼ地のふちを越えると、一歩ごとの足元が崩れるような小さな石片のざらざら道を、赤石岳の裏に回りこむようにしながら一気に下る。ここを登る気にはなれないなあと思いながら、道の所々で息をついている人たちに、コンニチハと挨拶だけしてすれ違う。下りついたところから百間平までは、気持ちのよいならかな尾根道だ。途中の小さなピークで一休みする。振り返ると赤石岳が大きい。この辺で昼寝でもしようかと思ったが、陽射しが強く日干しになってしまいそうだ。先を急ぐ理由もないのだが出発する。百間平はその名のとおり、ただの少々広い平地だ。溝状になったところを過ぎると、石がゴロゴロした斜面の下りになる。下の灌木対の中がテ



ント場のようなので、熊の平のようなところだといいなと思う。残念ながらテント場は斜面をただ削り取ったようなところだった。しかし沢が近く水が豊富なのでありがたい。やたら暑くてテントを張る気もしないので、沢でTシャツを洗い、冷たい水を浸したタオルで体の汗を拭く。少し涼しくなったところでテントを張り、昼食はとっておきの冷やし中華とする。昼食に満足していると、西側を山の斜面で区切られた空を、雲が横切るようになり、陽射しがさえぎられ過ごし易くなる。テントの中で少しウトウトとして気がつくと、空は完全に雲で覆われ、遠くで雷鳴が聞こえる。まもなく雨が降り出し、夕立となる。雷雨は1時間半ほど続いた。雨上がりの空気は、冷たく澄んで気持ちがいい。まだ遠くで鳴る雷鳴を聞きながら、夕食をとり、「雷三日」の言葉どおりでなければいいかと思いながら、明日の行程を考え早めに寝ることにした。

08月01日 02:30起床。今日は念願の聖岳に登る。午後からの雷雨が心配なので、早く支度をしようとするのだが、入山4日目のせいか注意力が散漫で手際が悪い。出発はテント場で最後から2番目となる。聖岳に行くには大沢岳を越えていかななくてはいけないという強迫観念で、他のパーティーは中盛丸山との鞍部に向かったが、一人大沢岳の直登を目指す。沢を渡り登り始めた途端、やめればよかったと思う。足元の大きな岩と、道をふさぐ曲がりくねった木の枝で非常に登りにくい。まるで木登りのように、木の枝をつかんで、引っかかりそうなザックを避けながら強引に登る。すぐに灌木帯から抜け出たのでホッとしたが、足場はまだ大きな岩を積み重ねたような道で歩き難い。登るに従い歩きやすくなり、道は急な斜面をジグザグに登るようになる。テント場にひとつ残ったテントが見る間に小さくなっていく。だんだん展望も広がりだし、鼻歌交じりとなる。そういわゆるクライミングハイだ。ほとんど走ってでも登れそうな気分だ。斜面が緩み、トラバース気味に行き、最後の盛り上がりを乗り越えると、大きな岩を組み合わせて置いたような山頂に着く。やはり聖岳に行くにはここからだ自分勝手に納得し鞍部へ下る。小さな尾根と窪地が入り組んだ道を抜け鞍部へ。再び中盛丸山へ登り返す。ジグザグを着実に登って山頂へ。一休みの後下りにかかるると、赤石岳側との違いに驚く。その名の通り丸くこんもり



盛り上がった這松の山が、裏に回ると急な崖のようになっている。浮石に注意しながら下る。下りきったところからなだらかの尾根をたどって小兎岳となり、また少し下って今度は兎岳への登りとなる。ただ黙々と登って山頂へ。今日は一気にここまで来たという感じで、先行グループにも追いついた。行動食をとりゆっくり写真でも撮ろうかと思ったが、晴天のわりに空気に透明感がなくちょっと蒸し暑い、それに昨日の雷雨と三拍子そろっていたのでは、そうゆっくりもできず出発する。細くつまずきそうな岩場の尾根を注意しながら下る。右の岩場にはめ込んだような兎岳避難小屋を見て灌木帯の中の鞍部へ。ガレや岩盤の歩き難い急登をあえぎながら登る。途中百間洞ですぐ上にテントを張っていた名城大のワングルに追いつく。ガレ場で一人が骨折したらしく引き返す相談をしていた。自分は一人なので注意しなければと思いながらも先を急ぐ。道は這松を縫うようになり、山頂もそう遠くないはずだと思うが、だんだんガスが出てきて展望もなく単調な登りとなる。稜線に出たところでレストとするが、風とガスであまりよい気分がせずレストもそこそこに歩き出す。

ガスの向こうから声が聞こえてきたら山頂だった。十数年憧れ4日間かかってたどり着いた聖岳は、ガスに包まれて静かだった。とりあえずここで食べようとしておいた梨を食べる。ガスが晴れればと思ったが、遠く雷鳴も聞こえ始めたので、心残りではあったが出発とし、パッキングしだすと、何の前触れもなくすぐ近くでドカン！とくる。まずいと思い、あわててザックを背負い駆け下る。ザクザクの石片の急坂もかまわず走る。道は右側に回りこみ草つきに変わるが、樹林帯まではと走り続ける。やっと樹林帯に入るが、雨も降り出したので、お花畑に目もくれず先を急ぐ。45分足らずで聖平に駆け下り、あわててテントを張る。ちょうど張り終えたところに、ザアッとくる。危うくセーフだった。小一時間ほど雷雨が続いた後小止みになったので外に出てみると、山頂で一緒だった人達がズブ濡れで降りてきた。いくら雷が怖いとはいえ、我ながら下りの早さに。しかし憧れの聖岳は、霧の中を登り、アットいう間に駆け下ってしまい情けなかった。

雷雨も遠のいたので落ち着いてコーヒーでも飲もうと水を汲み、テントで湯を沸かしだすと、またパラパラと降り始める。またかと思っているうちにドシャ降りになる。バケツをひっくり返したとはこのことだ。テントの周りに残っていた雨水避けの溝も見の間にあふれ出し、テントの底布の下を水がどんどん流れ始め、自分の座しているところと、物の置いてあるところ以外は、底布が水の上に浮き始めた。雨と同時に雷も激しくなる。ピッカ！ドカン！地響き、そして雷鳴が周りの山々にグウオォ〜ンと鳴り響いている間にまたピッカ！とくる。小屋に逃げ込もうと思ったときにはすでに遅く、10メートルほど先の小屋の入り口までが、その恐ろしさで行く気がしない。テントの中で何とかやり過ごそうと息を潜めているしかなかった。2時間半ほど続いた雷雨も何とか収まったようなので外に出てみる。もう4時も回りいつもだったらテント場も食事の用意で活気付く頃なのだが、聞こえてくるのは何故か小声の雷雨の話

ばかりだった。自分も気が抜けたような気分だったが、何とか気を取り直して食事の仕度を始める。夕食がおなかに収まった頃には、テント場もいつもの日暮れ時の落ち着いた雰囲気に戻っていた。

08月02日 03:00起床。昨日のような雷雨には会いたくないと思い、早く支度をしようと思うが、入山5日目ということと、昨日の雷雨の精神的疲れのせいか体がだるく、出発は遅くなってしまった。昨日の道を聖岳への分岐点まで戻る。聖岳に心を残しながらも分岐点を左へ。ひさしぶりに樹林帯の中の道を行く。なだらかな道をのんびりマイペースで歩く。軽く汗をかき、木の間越しに台地状ののぼりが見え始めたところでレストとする。再び歩き始めると道は登りへと変わる。登るにつれて樹林が切れ灌木帯へと変わっていくと同時に、陽射しが照りつけて暑くなる。すぐに登りつきそうに見えたが、左へ左へと回り込むような感じで登りが続く。何度か登りと平らなところを繰り返して、またかと思ったらそこが南岳だった。ピークといっても何の特徴もないちょっとした平坦地だが、振り返ったときの聖岳は圧巻だ。機能の雷雨がまるで嘘のように静かに大きくどっしり鎮座している。その山頂に立ったにもかかわらず、心の中では依然憧れの山のまま聳えていた。



上河内岳へは少々下って、肩との窪みに沿って登る。ザックをデポして、ジグザグを切って山頂へ。360度何の遮るものもない展望だ。大きな聖岳 その肩越しに赤石岳 霞んで見えるのは荒川岳か振り返ると茶臼岳か

上河内岳へは少々下って、肩との窪みに沿って登る。ザックをデポして、ジグザグを切って山頂へ。360度何の遮るものもない展望だ。大きな聖岳 その肩越しに赤石岳 霞んで見えるのは荒川岳か振り返ると茶臼岳か



ら緑の稜線が光岳へと続いている。十分展望を楽しんだ後山頂を辞す。肩まで戻りザックを背負って茶臼岳へ向かう。下っていくと窪地状の開けたお花畑に出た。小さな花をつけた高山植物の中をいく。道はザクザクの小さな石片の道となって西側の斜面を行き、しばし下って鞍部へ。行動食をと持ち鞍部に荷物を置いて茶臼岳に登る。山頂は大きな岩を重ねたようだ。座りやすそうな岩の上に陣取り、越えてきた山々を振り返る。聖岳が大きく隆起していて、それ以北の山々は見えないが、そこに在ことは解かった。そしてその山並みは、自分のいる茶臼岳を経て光岳へと続いていた。そんな景色を見ていると、もうすぐくる30歳の誕生日にこだわっていた自分がバカらしく思え、逆にこれから別の新しい山歩きができるような気がした。連日の雷雨で光岳へのピストンをあきらめたのは残念だったが、心の中に思い続ける山を持っていられることは良いことだと勝手に決めて、光岳にはまたいつか愛に来ようと思いつつ鞍部へ下る。ザックを背負って分岐点から上河内沢への道に入る。茶臼小屋にテントを張ろうかとも思ったが、斜面に開けたテント場では、雷雨の直撃を受けそうなので通過して下る。樹林の中の道をどんどん下っていく。水場で一口水を飲みまた下る。単調な下りと阿多差でいい加減嫌気が差してレストにする。しかし再び歩き始めるとすぐに横窪小屋だった。ここは樹林の中のテント場なのでここに泊まることとし、十分場所を吟味してテントを張り、雨溝もしっかり整備する。雷雨に十分備えたところで、小屋の横の沢で汗を拭き、コーヒーを飲みながら雷雨を待つ。そして予定通り雷雨はやってくる。昨日と同じくらいの激しさだったので、ここまで下ってしまったのは惜しい気もしていたが、それなりに納得した。

雷雨も去って最後の夕食の仕度をする。もう下るだけなので食料を全部片付けることとした。たいした物もなかったが、一応豪勢な夕食の後 ゆっくりと残りのアルコールを飲み干し、シュラフにもぐり込んだ。

08月03日 03:00起床。テントを撤収しこれから登り始める他のパーティーとは逆に一人下り始める。樹林の中を尾根伝いに下っていくと、左から暗い感じの沢が流れ込んでくる。その沢を吊り橋で渡った日の当たらない山ひだのようなところにウソッコ沢小屋があった。そのまま行って小さな



水場を過ぎ、鉄の梯子をくだり、幾つか吊り橋を渡ると、沢から離れるように緩やかなのぼりとなり、ヤレヤレ峠に着いた。どうもいつもの下山の雰囲気と違うと思っていたが、まだ朝が早いせいか気温が上がってはず、あの下界に下りてきたときの特有のムウツとした空気が感じられないせいのようなだった。峠から下ると畑薙大吊橋だ。話には聞いていたがさすがに長い。向こう側から人が来ないのを確かめて渡り始める。思ったほど揺れはしないが、歩いても向こう岸が一向に近くなれない気がした。大吊橋を渡るとあとは林道だ。ブラブラ歩いて畑薙第一ダムへ。バス停には人気もなく一番乗りだ。隠れることもなく 上から下まで着替えを済まし、ベンチで朝寝をする。人声が多くなってきたので起きてみると、バス停には人の列ができていた。これはまずいと慌てて並ぶ。何とか静岡行きが一番バスには乗れた。

3時間半程でバスは静岡へ。静岡は駅の北と南で町の様子が都会と田舎ほど違う。当然ながら田舎側の駅前の荷物預かり所にザックを預け、小さな食堂へ。打ち上げの久しぶりのビールがやけにうまかった。おまけに急行列車の時間待ちに何年かぶりにやったパチンコで、昼食代と帰りの汽車賃を稼ぎ出してしまった。おかげで列車の中では缶ビールを飲みながら、「終り良ければすべて良し」などと自分ひとりで納得して大満足だった。

4) コースタイム

年月日	時間		場所	備考
1984.07.29	08:00	着	塩川	朝食のパンを食べ、水を補給。
	08:20	発		
	09:25	通過	引き返す	道を間違える。
	09:35	通過	登山道戻る	右樹林の中登山道。
	09:42	着	尾根取付点	
	09:55	発		
	11:00	着	レスト	
	11:10	発		
	11:35	通過	5合目	
	12:12	着	レスト	
	12:25	発		
	12:55	着	レスト	昼食をとる。
	13:40	発		
	14:10	着	三伏峠	
1984.07.30	02:50	起床	三伏峠	
	04:40	発		
	05:23	着	烏帽子岳	

1984.07.30	05:36	発		
	06:11	着	前小河内岳	
	06:14	発		
	06:45	着	小河内岳	
	06:56	発		
	07:56	着	レスト	
	08:12	発		
	09:12	着	高山裏露营地	昼食をとる。
	10:05	発		
	11:06	着	レスト	沢部に入る。
	11:12	発		
	12:02	着	レスト	
	12:15	発		
	12:45	着	レスト	森林限界。
	12:50	発		
	13:21	着	尾根上	
	13:45	発		
	13:55	着	荒川前岳	
	14:15	発		
	14:50	着	レスト	テント場を見下ろす水場。
15:00	発			
15:15	着	荒川小屋		
1984.07.31	03:40	起床	荒川小屋	
	05:55	発		
	06:22	着	大聖寺平	
	06:32	発		
	07:26	着	小赤石の肩	白旗氏ご一行と行き会う。
	07:48	発		
	08:00	通過	小赤石岳	
	08:26	着	赤石岳	
	09:20	発		
	10:05	着	レスト	百間平手前のピーク。
	10:10	発		
	11:00	着	百間洞露营地	

1984.08.01	02:30	起床	百間洞露营地	
	04:41	発	地	
	05:48	着	大沢岳	
	05:58	発		
	06:10	通過	鞍部	
	06:30	着	中盛丸山	
	06:40	発		
	07:36	着	小兎岳	
	07:46	発		
	08:19	着	兎岳	昼食をとる。
	08:56	発		
	09:52	着	レスト	
	10:07	発		
	10:53	着	レスト	
	11:05	発	レスト	
	11:20	着	聖岳	雷鳴を聞く。
11:46	発			
12:30	着	聖平露营地		
1984.08.02	03:00	起床	聖平露营地	
	05:20	発		
	06:10	着	レスト	
	06:20	発		
	07:07	着	南岳	
	07:20	発		
	07:50	通過	上河内岳肩	荷物をデポ。
	07:55	着	上河内岳	
	08:10	発		
	08:15	着	上河内岳肩	荷物を持つ。
	08:20	発		
	09:07	着	茶臼岳分岐	荷物をデポ。
	09:28	発		
	09:40	着	茶臼岳	
	09:50	発		
	10:03	通過	茶臼岳分岐	荷物を持つ。
10:08	通過	茶臼小屋		

1984.08.02	10:30	通過	樺の段	
	10:39	通過	水飲み場	
	11:01	着	レスト	
	11:11	発		
	11:17	着	横窪沢小屋	
1984.08.03	03:00	起床	横窪沢小屋	
	05:10	発		
	05:32	通過	中の段	
	05:50	通過	ウソッコ沢 小屋	
	06:03	着	レスト	鉄ハシゴの上の水場。
	06:15	発		
	06:47	着	ヤレヤレ峠	
	06:52	発		
	07:12	着	畑薙大吊橋	
	07:17	発		
	08:15	着	畑薙第一ダ ム	